

## 入園初期における幼児の“適応”

—— 保育場面別の検討 ——

文 珠 紀 久 野

はじめに、本研究で用いる“適応”について規定しておく。

「子どもがある状況におかれた時、その状況を正しく認識し、実現されぬ欲望、解決されぬ困難な葛藤から生ずる感情的緊張を統制し、その状況からの要求と、自己の要求とを合致させるように自己の行動を変容させ、あるいは、合致していない状態（葛藤状態）にあることを適切な行動で示すことにより、その状況からの要求と、自己の要求のアンバランスの調整に援助を求め、より状況との調和的關係を形成するための努力をしている状態をさす。」

### I 問 題

子どもが幼稚園へ入園した時、「母から分離されるのを嫌がって泣く」・「じっとしている」という行動がよく観察されるといわれる。しかし、その行動も保育の進行とともに次第に消失し、入園後2～3カ月で“適応”状態になると従来いわれてきた。

従来の研究のほとんどは、宮井（1971）、文珠（1973）などにみられるように、保育者1名のみによる観察・“不適応”行動指標を前もって設定し、その“不適応”行動の多少による対象園内の相対比較で“適応”児・“不適応”児を取り出し、その両者の違いをもたらした要因を検討する方法がとられてきた。

ここで、子どもの行動の観察法をより確かなものにするため、2人の観察者を用いること、対象園内の相対比較で“適応”児・“不適応”児を取り出すのではなく、“適応”基準を設定し、そこへの到達程度で“適応”・“不適応”をとらえられるように観察法を改良することを第1の目的とする。

入園当初に見出される“不適応”行動は、一過性の行動であるといわれている（宮井，1973）。しかし、文珠（1975b）が、入園当初から1年間子どもの行動を観察した結果、“適応”過程には個人差がみられること、行動の内容によって“適応”過程に相違が生じることを見出している。そこで、入園当初の“不適応”行動は、単に一過性と考えられず、保育場面によって、個々の子どもの

“適応”過程が異なるのではないかと推測される。そこで、登園場面・設定保育場面・自由保育場面・降園場面における個々の子どもの“適応”過程の相違を検討することを第2の目的とする。

また、その“適応”過程に違いをもたらしているのは、保育場面だけでなく、子どもが入園までに経過してきた環境と無関係ではないと考えられる。その中でも、母親の養育態度・子どもの性格・社会性が大きく影響しているのではないかと考えられる。

従来の研究をみると、子どもの社会性の遅れなど子どもの側に何らかの問題がある場合、入園という新事態に対し、“不適応”行動を生起させやすいといわれている。しかし、親の養育態度については、一貫した結果が見出されず、これは、“不適応”行動の指標のとり方に問題があるのではないかと推測された。

そこで、第3の目的として、保育場面により“適応”過程にみられる違いが、どのような要因に影響されているのかについて検討を行なう。

### II 手 続 き

i 観察用チェック・リストを作成する。1日の保育の中で、登園場面・設定保育場面・自由保育場面・降園場面を選択し、それぞれの場面の保育課題への到達水準を3段階設定する。個々の子どもがどの到達水準にあるのかを評定する。

ii 被観察者は、新入園児126人（男60人・女66人）で、平均年齢は、4歳6カ月である。観察は、1クラスについて2人1組で行ない、観察者2人の一致度が96になって以来、1クラス1名で行なった。観察期間は、入園式直後の1978年4月12日から8週間である。

iii 入園式前に被観察児の母親へ「田研式親子関係診断検査」・「田研式社会成熟度検査」・「幼児・児童性格検査」・「母親の子どもを入園させるにあたって抱く不安の調査」の4種の調査を依頼した。回収率は、100パーセントであった。

### III 結 果

i 観察結果の整理を行なった。それぞれの子どもの

ついて、各場面の各保育課題ごとにチェックされている段階を、場面ごとに総合判定し、得点化した。この得点を2週間を1 block とし、平均“適応”得点を算出した。

ii 各 block ごとの平均“適応”得点を1.50を基準にして、1.50以上のときは“不適応”、1.50未満のときは“適応”と判定する。この判定結果をもとにして、“適応”過程のパターンを7種類抽出した。

iii 各保育場面の連関は、いずれも低く、それぞれの場面における“適応”過程は、かなり独立であることが見出された。

iv 登園場面の“適応”パターンとの関連が見出されたのは、親の養育態度においては、「消極的拒否」・「積極的拒否」・「不安」・「不一致」の養育態度型であった。また、「母の不安」も関連していることが見出された。子どもの性格では、「攻撃性」に、社会成熟度では、「からだのこなし」・「自己統制」・「着衣」の各能力に有意な関係が見出された。

v 設定保育場面の“適応”パターンとの関連が見出されたのは、「母の不安」と、子どもの性格特性の「自制力」・「自主性」・「退行性」であり、社会成熟度においては、「仕事の能力」・「ことば」・「集団への参加」・「自己統制」・「清潔」・「排泄」・「着衣」であった。親の養育態度については、関連が見出されなかった。

vi 自由保育場面の“適応”パターンとの関連が見出されたのは、社会成熟度の「清潔」・「排泄」の能力であった。親の養育態度・子どもの性格との関連は見出されなかった。

vii 降園場面の“適応”パターンとの関連が見出されたのは、「母の不安」と社会成熟度の「排泄」能力であった。親の養育態度・子どもの性格については、関連が認められなかった。

#### IV 考察

入園当初にみられる“不適応”行動は、一般的に減少するといわれ、それらの経過を個々の子どもについて詳細にみると、個人差があることが見出されてきた。とこ

ろが、その個人差も保育場面 — 登園場面・設定保育場面・自由保育場面・降園場面 — によって影響されると思われる。つまり、子どもにとって、保育場面の意味が異なって受け取られ、それゆえに、保育場面によって“適応”過程がことなるのであろう。

“適応”過程のパターンは、文珠(1975c)によって3種類抽出されている。しかし、“適応”状態になるまで要するといわれる入園後2カ月間の“適応”パターンをみると、その3種以外に、次第に“不適応”状態になってゆくパターン・時折“不適応”状態や“適応”状態を示すパターンなど4種類のパターンが見出された。しかし、これらは、“適応”の基準のとり方、観察期間の長さなどによって変化する可能性が考えられ、今後、いそこの検討が望まれる。

入園当初の“不適応”行動は、保育場面によって関連する要因が異なるといえる。つまり、登園場面は、親の養育態度だけでなく、子どもの性格や社会成熟度も関連し、それらが相互にからみ合って、“不適応”行動を出現させるといえる。

設定保育場面は、親の養育態度は影響せず、むしろ、子どもが、教師によって設定された状況にどのくらい自分をあてはめられうるかという能力や、その状況へ自らをコントロールして入ってゆけるかという子どもの側の問題に左右されるといえよう。

ところが、自由保育場面では、有力な要因は見出されなかった。このことより、子どもの側や親の側の要因というより、むしろ、子ども同士の社会的交流を行なう際の対人関係のあり方の問題が、関係しているのではないかと推測される。この点について、今後の検討が望まれる。

降園場面においても、十分な関連が見出されなかった。これは、1つには、“適応”パターンが片よっていたためであろうし、降園し、帰宅するという場面の特殊性が作用しているのかもしれないと考えられる。

以上のように、場面によって個人差のみられる“適応”過程に影響する要因が、異なることが見出された。